

くにしせき
国史跡

うしくび す え き かまあと
牛頸須恵器窯跡

大野城市教育委員会



① 古墳時代の牛頸窯想像図（イラスト 岩本 恵）



② 平田窯跡群 D-1 窯最終床面と灰原

大野城市の南部牛頸と上大利を中心にして、一部は春日市と太宰府市を含む一帯には古代の焼物である須恵器を焼いた窯跡がたくさんありました。今までに発掘調査を行った窯跡が300基を超えていますが、南部の山間部には未調査の窯跡が100～150基あることがわかっています。発見されることもなく失われた窯跡もあったでしょうから、全体では500基以上あったのではないかと推定しています。

最も古い窯跡は平野に近い上大利の窯跡群で、6世紀の中頃に須恵器生産が開始されたと考えられます。そして、生産を中止するのが9世紀前半から中頃にかけての時期と考えられます。最も新しい窯跡は牛頸の山深い場所にある石坂窯跡群で見つかっています。おおよそ300年間須恵器生産が行われたこととなります。これらを牛頸窯跡群と呼んでいますが、その重要性が認められて平成21年2月12日に牛頸須恵器窯跡という名称で国の史跡に指定されました。



③ 6世紀の須恵器



④ 8世紀の須恵器



⑤ 月ノ浦1号窯跡出土軒丸瓦



⑥ 野添7次2号窯跡出土陶棺



⑦ ハセムシ窯跡 12 地点出土 ヘラ書き須恵器

ここで見つかる窯跡は7世紀中頃までは全長が10mを越える大きなものです。そして煙の出る穴が複数あることから、多孔式煙道たこうしきえんどうと呼ばれる構造の煙道を持ち、煙が出る部分に弧状の溝の付くことが特徴です。また7世紀後半以後の窯跡は全長が2～5m程度の小型の窯になることと、煙り出しが円筒状にまっすぐ伸びること（直立煙道）が特徴です。

発掘調査では多くの須恵器が見つかりました。形は時代によって違ってきます。写真③は6世紀の須恵器、④は8世紀の須恵器です。大きな甕は8世紀後半には作られなくなり、9世紀になると再度生産されます。

発掘調査で見つかるものは須恵器以外にもいろいろなものがあります。たとえば瓦です。写真⑤の月ノ浦窯跡群から見つかった庇を飾る瓦（軒丸瓦）は花卉の部分ひさしが普通は出ているのに対し、窪んでいるという珍しいものです。7世紀前半頃のもので全国的に見ても大変古い瓦です。

写真⑥の野添窯跡群から見つかった陶棺とうかんは文字どおり亡くなった人を入れるお棺ですが、近畿地方や岡山周辺では多く見つかるのに対し、九州では大変珍しいものです。

写真⑦は漢字の刻まれた須恵器の甕の破片です。和銅六年とあり、西暦713年に作られたことがわかります。他に奈珂郡という地名や手東里という地名、そして大神おおみわという人名も刻まれており大変貴重なものです。